



《SNS疲れ / 西野カナと比較 / サカナクションの歌詞の特徴 / バンプの歌詞の特徴 / 夏目漱石が芥川龍之介の作品を読んだとき / 》

神聖かまってちゃんと西野カナの歌詞

——芥川龍之介の役割を担ういかれたNEET

ツイッター疲れを感じる。というか、SNS疲れといったほうがいいか。老人からいわせれば「何を言っているんだ？」という反応が返ってくるのが分かるが、あえてこれを云わせて欲しい、いま「若者は疲れている」。

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、西野カナを軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

# 神聖かまってちゃんと西野カナの歌詞

芥川龍之介の役割を担ういかれたNET

ツイッター疲れを感じる。

というか、SNS疲れといったほうがいいか。老人からいわせれば「何を言っているんだ？」という反応が返ってくるのが分かるが、あえてこれを云わせて欲しい、いま「若者は疲れている」

。

↓

若者の文化を色濃く反映されるアニメではまだそのような描写は行われていないが、近いうちにSNSに疲れる美少年と美少女が描かれるだろう。表現物でそのような作品にわたしはまだ出会っていない。もしかしたら、ライトノベルやマンガなどでそのようなことが描かれているかもしれない。

ミュージシャンたちはどのように感じているのだろうか。↓

ミュージシャンたちはどのように感じているのだろうか。佐野元春いわく、ミュージシャンは現代の詩人だ。それを云ってしまうと、現代の詩人である谷川俊太郎はどのようなんだ、と思わなくもないが。

例えば、サカナクションは詩的である。彼らの楽曲『ユリイカ』ではそれが色濃く出ている。《いつも夕方の色／空を喰うようにびっしりビルが湧く街／君が言うような寂しさは感じないけど思い出した／ここは東京／なぜがドクダミと／それを刈る母の背中を思い出した》。

うーむ。分かるようで分からない。だが感じる何かがある。



ならば、バンプオブチキンをみてみよう。↓

ならば、バンプオブチキンをみてみよう。『花の名』という楽曲である。《一緒に見た空を忘れても 一緒に居た事は忘れない／あなたが花なら 沢山のそれらと変わらないのかも知れない／僕だけに 歌える唄がある》

とても分かる。というか、分かりやすい。

サカナクションの歌詞は風景描写をどんどんくり返していく。↓

サカナクションの歌詞は風景描写をどんだんくり返していく。一方、バンプオブチキンは名言っぽいことを放っていく。違いはそれだ。

バンプオブチキンは一見すると、すぐ分かるし、何より分かりやすい。サカナクションは一見して分かりやすさはないが、じっくり感じるたしかなものがある。

どちらがいま珍しいと感じるかといえばサカナクションの方である。そうして考えていくと、いまのロックシーンはバンプオブチキン的な名言バンドが多いということだ。彼らの影響を受けたバンドが多いということだろうか？サカナクションのようにジトッと延々風景を描写して感じてもらおうというバンドは少ない。そもそもそれは歌謡曲に多くみられる手法だ。二つは名言的なバンドと詩的なバンドに分けられるだろう。

SNSをガンガンやってノイローゼになってる風景が思い浮かばない↓

とはいえ、彼らが現代の詩人といえはそれはそうなんだけど、  
そうではない気もしてる。

彼らが↓

とはいえ、彼らが現代の詩人といえはそれはそうなんだけど、そうではない気もしてる。

彼らがSNSをガンガンやってノイローゼになってる風景が思い浮かばないからだ。それらと距離をきちんととっているような気がする。

しかし、音楽の受け手であるリスナーはもうすこし墮落しているはずだ。SNSをやってLINEをやってヘトヘトになりつつある。そのように精神をすり減らす繊細な人間がロックを志向する。しかし、彼らはその繋がり合うゲームからは抜けることができない。そういった彼らを代弁するような詩人が必要ではないか。

例えば、西野カナは歌詞のなかで《メール》というワードを出す。↓

例えば、西野カナは歌詞のなかで《メール》というワードを出す。現代人がメールで一喜一憂する今の時代、そのワードを使わない手はない。なぜどのミュージシャンも使わないのだ、これこそが、西野カナこそが現代の詩人だ。と理論上いえるわけだが、なんだか《メール》と歌で出されると聴いてるこちらが恥ずかしくなるのはなぜだろう。

かつて、夏目漱石は芥川龍之介の作品を読んだときに「文学の天窓を開け放ったような」と云ったという。西野カナによるJ-POP界の天窓を開け放たれた爽快感で、今の日本のポップス界の歌詞世界はもっと豊富な感性にあふれているはずだ。

と思ったらそんなこともなかった。現代人で文通している人間とメールしている人間どちらが多いといえどノータイムでメールと答えることができる。にもかかわらず、歌詞では相変わらず「手紙」に親しみを感じているわれわれ。

歌詞の言葉の使い方は時代とともに変わるものだ。阿久悠は↓

歌詞の言葉の使い方は時代とともに変わるものだ。

これは歌謡曲の怪物である阿久悠がいていたことであるが、例えば、ある時代、汽車は窓を開けることができた。汽車のホームと発進してる汽車の窓から顔を出す人の風景を描写すれば別れの歌として非常にドラマチックになった。ところが、新幹線になり、窓から顔を出すことができなくなる。そうすると以前のような、汽車から顔を出して別れる表現は使えなくなるという。

文明の進化と生活の変化で表現は変わってくるというのだ。

とはいえ、やはり歌で《メール》や《LINE》なんて言葉を出されたら引いてしまう。↓

とはいえ、やはり歌で《メール》や《LINE》なんて言葉を出されたら引いてしまう。その理由はいまのわたしにはわからない。これは文化人類学なのか、言語の学問なのか、どこか専門機関がその理由を解いているかもしれない。うーむ、むつかしい(説があればわたしのところにメールくれ)。

わたしが思う現代の詩人は神聖かまってちゃんである。↓

わたしが思う現代の詩人は神聖かまってちゃんである。彼らは《メール》や《LINE》というワードこそ使わないものの、非常に現代的なバンドだと思える。例えば『いかれたニート』という楽曲ではタイトル通り《いかれたニート／いかれたニート》とサビでリフレインされる。ロックを志向する者は表層こそまともな身なりをしているが、内部は怠惰で墮落、こんな自分のことなんて誰も分からないさと心に闇を抱えて生きている、ニート精神をもつ者だ。

例えばThe Peggiesはそのような属性を一二〇パーセント体現している楽曲を作り続けている。しかし《ニート》というワードを出すことはない。（なのに、歌詞の端々から惰性ややるせなさやニート感を溢れさせているので、Peggiesの凄まじさを感じる）



以前、Charaが↓

Theピーズはそのような属性を一二〇パーセント体現している楽曲を作り続けている。しかし《ニート》というワードを出すことはない。

神聖かまってちゃんはダイレクトにそれを打ちだした。

以前、C h a r aがインタビューで、愛について歌を書くときに周辺をぐるぐる描写するより「愛してる」って言っちゃえって思った、と答えていた。それは、状況や風景を描写する歌謡曲の時代に育った彼女なりの音楽界へのアンチテーゼだった。

神聖かまってちゃんもそうだ。〇〇年代中期からのロックシーンのバンドが不景気や不幸、自傷や内省を背負ってうずうずそれを描写してるなかで、彼らは一言で殺してみせた。『いかれたN E E T』である。

↓

ほかの楽曲では《リスカ》《躁うつ》《精神薬》《自殺》というワードが使われる。単なるギミックとしてそれが使われていたなら、リスナーは一瞬で見抜く。神聖かまってちゃんにそれが内在している。誤魔化したり、変にフィルターをかけることない彼らの誠実さにリスナーは惹きつけられている。



彼らの言葉は現実と繋がっている。↓

彼らの言葉は現実と繋がっている。上から目線でいわれている感じがしない。自分が立ってる地面と同じ延長線にある地面に立っているように思える。今の時代に生きてるから今の時代の想像力を作品に出せるわけではない。の子（神聖かまってちゃんのボーカル）の狂気がこの時代とリンクしているからそれが出るのだ。

手紙からメール、公衆電話からケ↓

手紙からメール、公衆電話からケータイ電話、文通からSNS、人のコミュニケーションや文明や生活はどんどん変わっている。昔を懐かしむのは過去のバンドにまかせておけばいい。一〇年代はゼロ年代に育った新しい世代のものだろう。ロックをわれわれの手に取り戻そう。

文学界における芥川龍之介的な役割をロックシーンで神聖かまってちゃんがおこなっている。←

うおお

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/89375>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社ブックログ